

いのちに寄りそう ～悲しむ人のかたわらで～
(平成 29 年 1 月 31 日 講師：田村 里子 先生)

田村先生は、医療ソーシャルワーカーとして 30 年以上にわたり緩和ケアに従事され、患者やその家族、また亡くなられた方の遺族の方の相談相手として活躍されてきたが、今回はそのような場面の「言葉」を通じて感じてこられたお話であった。

大切な家族を看ている方が常に思われているのは、なぜ・何とかしたい・離れたくない・私の業が深かったからという、自責の念や悲しみそして憤りという強い思いだという。

人生の悲しみは何かを失うことで生まれるのだとおっしゃっていた。ということは、大切な人を失うということ、若しくは自分が失われると感じることは耐え難い悲しみに襲われるということである。では、周りにいる者は何が出来るか。そこで力になるのは「言葉」であるとおっしゃっていた。語るということの大切さ、語ることで意味を見だし、そして癒されていくのだそうだ。亡くなられた方は帰ってはこないし、悲しみが消えることもないが、想いをありのまま率直に語ってみる、同じ境遇の仲間が寄り添いあって分かり合っていくということが、非常に意味があるそうだ。亡くなった人を話しながら偲ぶ、そして想いを分かち合う、そうして悲しみや嘆きを変化させていくことが出来るということであった。ただし、人それぞれの方法やペースがあり、様々な整理のつけ方がある、しかし街中で人と会うといつまでもよくよしていないでしっかりしなさいと叱られている気がするという声をよく聞かれるそうだ。

今の社会では、大切な人を亡くしたという気持ちを持ったまま生きていくには、世の中の流れと時間の流れ方のギャップが大きい。普段の社会生活を送っている中で、すぐ隣にそのような想いを抱えているかもしれないとはなかなか想像できるものではないが、実際には苦しんでいる方、生きづらさを感じていらっしゃる方は多いのだと思う。「喪失を悼む涙が求めるものは答えではなく耳を傾けること」というお話があったが、想いを語ることで亡き人が偲ばれる。その方の人生や歴史がぎゅっと詰まったその言葉がつながりを生み出し、新たな一歩へとつながっていくのだと感じた。

これからも、ずっと悲しみのなかにいらっしゃる方に寄り添い、耳を傾け亡くなった方とご家族とをつなぎ続けられることと思います。